

槐

かい

岡井省二創刊

令和2年1月号

令和二年一月一日発行 第二十九巻第一号 誌巻第二四三号（毎月一回一日発行）
平成二年九月十八日第三種郵便物認可



春秋抄

高橋将夫 推薦

極 渋と甘きかをりの榎櫃の実
宗 像や刈田のさきに勇魚塚
十 月の錦市場や糸り善や
秋 の日の粒子浴びけりガラスペン
正 直であつただろうか木の实落つ
山 靈の秋惜しみぬる葉擦れかな
向 日葵の種子は叶界の嘘を知る
「 いらつしやい」と娘に言はむ秋薔薇
天 道の角を曲がりし雁の列
こ の林檎魔法か毒かかじつてよ
穴 惑ひ日向の温み引きずりて
野 仏の口元ゆるぶ柿一つ
逃 げてまた同じ稲穂へ稲雀
じ つと居る蠟螂きみも淋しいか
比 叡の山に野分しみ込む音がする
金 色の影を生みたる榎櫃の实
狛 犬の見つめる先の神の留守
人 滅ぶ一線のあり狼よ
紅 葉の木々に宿れる華厳かな
加 藤みき
中 島陽華
竹 内悦子
雨 村敏子
本 多俊子
近 藤喜子
瀬 川公馨
柳 川 晋
熊 川 暁子
江 島照美
寺 田すず江
岩 下芳子
有 松洋子
岩 月優美子
近 藤紀子
竹 中一花
前 田美恵子
中 田禎子
吉 田順子

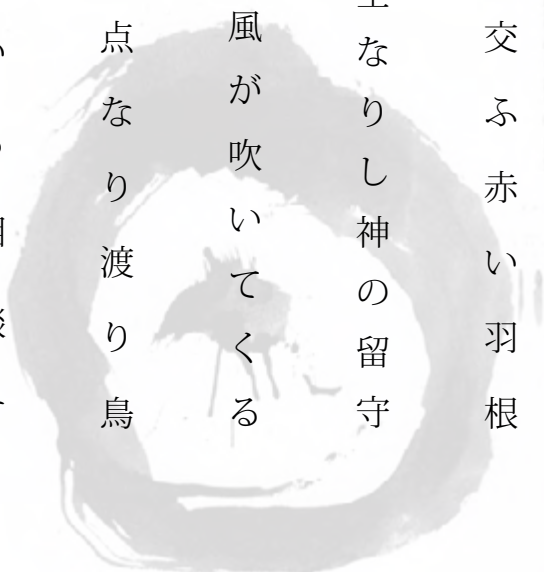
通過点

高橋将夫

稲穂波五重塔を揺らしけり
巻尺の戻るがごとく蛇穴に
案山子にも個人情報ありにけり
柘榴の実赤い秘密が露見せり

領空は犯さずに消ゆ流れ星
生活の匂ひを消して金木犀
駅前に愛が行き交ふ赤い羽根
セキユリテイー万全なりし神の留守
セシウムの色なき風が吹いてくる
ここはまだ通過点なり渡り鳥
秋懐や答でてから相談す

櫛二十八年全国大会



槐安集

加藤みき

極渋と甘きかをりの榎櫃の美
縫初めのボタンをつけてゐたりける
コンクリの内枯草醸しゐたりけり
手毬かと思へどすぐにキャッチボール
須弥山へ朗朗のこゑ星月夜

中島陽華

懐かしの膳所に降りてや花芭蕉
シボレーのエンジン音と曼殊沙華
ことのはの潤^{ほと}ぶる秋となりにけり
赤梨や耳の奥なり浪花節
宗像や刈田のさきに勇魚塚

竹内悦子

発火点のきつかけは何時曼殊沙華
蕎麦食べて御池通りにゐたりけり
大椿象の綺麗な蒼や暮の秋
十月の錦市場やゑり善や
お祭りマンボ菊を食べたり歌うたり

雨村敏子

秋の日の粒子浴びけりガラスペン
をかしくていく度笑ふ瓜の棚
石落咲いて海がぱかっと見えてくる
頤や鯛のあら煮と枝豆と
月光や水をのせたる漆盆



本多俊子

縮飛んでとんで夕日せまりけり
正直であつただろうか木の実落つ
頂いて辞書の重さの真桑瓜
空晴れて一握りほど櫛もみじ
秋風やこころ寄らしむ古歌ひとつ

近藤喜子

こだほりを我も捨てやう蘆の絮
山霊の秋惜しみぬる葉擦れかな
毒茸や口約束の脆きこと
銀杏黄葉いま生きてゐる浄土あり
手暗がりのメモの遠さよ夕紅葉

瀬川公馨

大ぼらや脳内革命茗荷の子
枯れてなほ血脈のこすカンナかな
櫛の実の銀色を待ちてゐし
向日葵の種子は世界の嘘を知る
草の戸にけふも元気やちちる蟲

柳川晋

曼殊沙華ケルトの道は渦巻に
卒塔婆のごときビル群いなつるび
竜淵に潜むとみせて香港へ
この星の裏まで泳げ鱗雲
「いらつしやい」と娘に言はむ秋薔薇

熊川 暁子

見えさうな金木犀の香でありぬ
天道の角を曲がりし雁の列
殞の森をぬけて色なき風となり
奥嵯峨は虫の闇また竹の闇
露の玉炎の生みし壺一つ

江島 照美

この林檎魔法か毒かかじつてよ
花心にはじつと留まる秋の蝶
成熟を拒んで生きる青蜜柑
おなもみや共に歩むも人の道
冬瓜やわたしの色に染めてみる

寺田 すぐ江

能面の奥は花野につづきけり
あるがまま生きて秋寂ぶ余生とは
煩惱を抱きて沈む月夜茸
穴惑ひ日向の温み引きずりて
銀河濃し歓声あがるノースайд

岩下 芳子

野仏の口元ゆるぶ柿一つ
十月や過ぎゆくものと来るもの
てまらよくイテと河原を掃きし千鳥の尾
大門をくぐりて伊予の櫛紅葉
副業を考えてゐる菊人形

有松洋子

菊人形衿元きつく締めてをり
夕星へ発つ風ありぬ大花野
バリトンで唄ふ大樹や黄落す
動かせぬものに囲まれ夜長かな
逃げてまた同じ稲穂へ稲雀

岩月優美子

じつと居る蠓螂きみも淋しいか
不器用な指で眉引く秋思かな
出合ひから別れはじまる流れ星
秋の田の大一枚の宇宙かな
生と死のまん中辺り柿熟す

近藤紀子

比叡の山に野分しみ込む音がする
野紺菊つめば背後に人のこゑ
刈り終へし田んぼの広さ深呼吸
濁流に立ちつくすのみ秋出水
錦秋や下りの坂をそろそると

竹中一花

雲速し洞ヶ峠を越ゆる冬
金色の影を生みたる榎櫃の実
行道や照葉の空に雲の道
黄葉の森に父くる母と来る
吾亦紅山のじいさんにこにこす

前田美恵子

先陣を切つて飛び込む稲雀
そろそろと我が身を思ふ新豆腐
青蜜柑腕白盛りの子等の声
狛犬の見つめる先の神の留守
色変へぬ松や主を物語る

中田禎子

人滅ぶ一線のあり狼よ
不死鳥の燃ゆる紅葉に潜みをり
山伏の広き背の入る蔦の門
秋鯖の花脊を越ゆる辺りかな
二つ買ふ豆大福や御所の月

吉田順子

紅葉の木々に宿れる華厳かな
秋思ふと父母の写真を手に乗せて
からす瓜高笑ひする虚空かな
青空にみごと爆ぜたる蔓もどき
来し方にかかはり深き八ツ手咲く



槐市集

杉原ツタ子

母と居る比叡の庭の小鳥かな
夏風邪は神のいたづら甘露飴
蒼天や見慣れし鉄塔より高し
櫨紅葉ひときは朱し山の晴
鳩尾の軽き痛みや曼殊沙華

高野昌代

洒落つ気は秋光に消され闇の中
傾げても踏んばりをるやあの案山子
通夜客帰路なる道の星月夜
豊州一年戻り鯉の晴れ姿
漫画とは絵で描くポエムやなせの忌

竹村 淳

無垢の子に無垢の布団の掛けてあり
糲袋肩にずしつと陽のぬくみ
銭湯の煙も遠慮秋の空
やぶからし繁りて村をきびしゆうす
墨たつぷり新蕎麦ちらし風にゆれ

田中 信行

夜学子や四声の習ひ漏れ聞こゆ
頂と麓を分かたつ霧の帯
栗ご飯お国詫りの旅情かな
すれ違ふ男と女曼殊沙華
モネと会ふ紅葉の丘の美術館



田中美恵子

手作りの木箱ありけり小鳥くる
神楽殿へ白無垢まとひ秋の天
高だかと令和掲げる案山子かな
茶の花の挿してありけり貴賓館
赤飯の艶よく炊けり月の秋

時 澤 藍

毬栗をうかがふ虫の薄目かな
秋湿り時流に乗れぬへそまがり
肩の荷は日々の生きがひ石路日和
イヤイヤのしぐさしきりや枯尾花
納得のいくまで模索秋あかね

中 貞 子

結界の根曲り竹や今朝の月
朝まだき太極拳や鳥渡る
菊の香や点前いたたく勅使館
心柱しかとありけり水引草
夕月や軽き身のなほ軽かりき

中 島 昌 子

朝な朝な露の匂ひのスニーカー
草原に横たふ木道秋うらら
稲穂波古墳を囲みそよぎけり
人の世をも少し見やうか穴惑
芒活け身の内に風誘へり

中 西 厚 子

思ひ出す事にのみある過去の秋
秋彼岸表札眺む父系の目
頂を越えて手に入る秋高し
秋浅し私は山に恋をする
生肉をせせる鳥に秋日照る

中 堀 倫 子

叱られて口ごぼりたる鳳仙花
秋彼岸三色おはぎただけり
お互いに追ひつ追はれつ赤蜻蛉
少年は一点みつめ秋の風
虫よけの匂ひがしたる秋の服

槐集

高橋将夫選

秋の空ぬける青さが抜けて闇
守口 三木 享

秋気澄み天から漏るる絵空事

烏瓜まつ赤な嘘の夕日浴び

風紋を心に残す秋の風

犬死にを隠す美談と菊の花

消灯や我が家を虫に明け渡す
大阪 平野 多聞

膝枕ぼんと叩いて秋に入る

人麿呂の忘れし筆か芒揺る

木の実降る降る日を決めてゐるらしき

大道を説いて笑ひしきりぎりす

いわし雲帰らぬ日々のを追ふ
藤田美耶子

爽やかに心を洗ふ美術館

ロマンスを問はず語りに月の友

紅玉を食めば心の素直なり

酔芙蓉捕へられたる虫のあり

蒼宵や丹波山々鷹渡る
芦屋 田中 信行

ラグビーボールのごときオムレッツ今朝の秋

噂とは最古のメデア秋の空

祖父を知る女将の酌やちちろ鳴く

デフォルメの思ひ出語る母の秋

蒲の穂絮おとぎ話しを風にのせ
岡崎 柴田 靖子

そこに生き其処に夢見しかまどむし

色絵具ぶちまけしやう秋の山

名なき草もやさしき秋の花となる

星月夜ただ眺めゐて無我となり

うそ寒と誰かが言うた風が言うた
竹原 久保 夢女

ちんちろりんいいえあなたは悪くない

月円かあたたかき手に巡り合ふ

どの道を行くも金木犀の道

破れてなほ風待ち受ける芭蕉なり

銀河往来

◆槐集観照

秋の空ぬける青さが抜けて闇 三木 亨
「抜けるような青い空」という表現があるが、「もし抜けたら、そこは闇だ」と作者は言う。着眼が尋常でない。

〈烏瓜まつ赤な嘘の夕日浴び〉の句では烏瓜と夕焼けの赤が「真つ赤な嘘」に飛躍する。

〈風紋を心に残す秋の風〉の句、秋風は風紋を消しても、心に残すところがいい。

〈犬死にを隠す美談と菊の花〉は、例えば菊人形の自刃の場面を想像させる。ここでは犬死にの場面も美談の場面に見えている。

消灯や我が家を虫に明け渡す 平野 多聞

「我が家を虫に明け渡す」の措辞が、消灯をして虫の声だけが聞こえている闇の情景を見事に表現している。

〈膝枕ぽんと叩いて秋に入る〉〈人麻呂の忘れし筆か芒揺る〉
〈木の実降る降る日を決めてゐるらしき〉の句、それぞれ作者ならではの視点があり読者を頷かせる。

いwash雲帰らぬ日々のを追ふ 藤田美耶子

確かに、颯雲は帰らない日々を追うようにして彼方へ流れ去ってゆきく。

〈ロマンスを問はず語りに月の友〉の句、月を見ればついつい話したくなるのだろう。さもありませんと思う。

噂とは最古のメディア秋の空 田中 信行
噂はすぐに広まる。「最古のメディア」とはさすがプロ。
〈デフォルメの思ひ出語る母の秋〉の句、噂も思い出もどうやら変形するものようだ。

蒲の穂絮おとぎ話を風にのせ 柴田 靖子

「因幡の素兎」の昔話を思わせるような蒲の穂絮と秋風だったのであろう。

〈そこに生き其処に夢見しかまどむし〉の句は竈馬への慈愛に満ちている。

ちんちろりんいいえあなたは悪くない 久保 夢女

ちんちろりんは松虫。「ちんちろりん」が「あなたは悪くない」と言っているように聞こえてきそう。

〈月円かあたたかき手に巡り合ふ〉や〈破れてなほ風待ち受ける芭蕉なり〉の句は作者のあたたかな人柄を偲ばせる。

冬耕や眠れる土を揺り起こし 竹村 淳

「眠れる土を揺り起こし」が冬耕の本質に迫る。
〈牡丹焚くひとときの火に祈るかな〉、火は祈り。

此処に居る意味を教へる秋夕焼 中西 厚子

美しい夕焼け。そう、私がここに居るのはまさにこの夕焼けを見るために他ならない。

〈以下略〉